女子美

No.168/2011

2P 卒業生 小野さん シェル美術賞グランプリを受賞
4P 創立110周年記念式典・イベント　報告
11P 林 規章教授 ADC賞受賞　他
12P イルカ客員教授特別講義
13P 連続講座「宇宙・人間・アート」を実施　他
14P 仲條正義客員教授特別講義　他
15P きのこ同好会が「きのこ展」に出展　他
16P 東京デザイナーズウィーク2010　報告　他
17P 文部科学省GPに採択　他
18P シンポジウム「誰のためのアートなのか」開催　他
19P 100周年記念大村文子基金
20P 女子美祭2010
22P「2010就職フェア」レポート　他
23P サマー・スクール報告
24P 女子美アートミュージアム展覧会情報
25P 卒業制作展・修了制作展のご案内

女子美術大学広報誌

Interview

卒業生 小野さおりさん
シェル美術賞2010のグランプリを受賞

若手作家の発掘を目的としたシェル美術賞の2010年の選考会において、本学卒業生の小野さおりさんの作品（本誌の表紙）が、1410点の中から見事グランプリに選ばれました。小野さんは大学院修士課程洋画研究領域の修了生で、現在は相模原キャンパスの学生相談室に勤務しながら、作品制作を続けています。今年の夏には群馬県立近代美術館の群馬青年ビエンナーレでもグランプリを受賞されました。この度、シェル美術賞では初めての試みとなる受賞作家によるアーティスト・トークに参加し、多くの参加者の前で受賞の喜びを語ってくださいました。またイベント終了後、作品制作についてお話をお伺いしました。

■絵を描く行為が祈りに通じている

私は、2005年からシェル美術賞に応募していまして、今回は6回目の挑戦でした。2005年と2008年には入賞させていただいたのですが、落選したときは、やっぱりだめだったかという思いと、どうしてわかってくれないんだろうという、気持ちの葛藤がありました。

今回の作品は、自分の中でモチベーションが今までと違ったものでした。30歳を目前に考えるところもありましたが、何よりも絵を描く行為が、私にとって祈りに通じているということを感じたことが大きかったと思います。今年の3月に断食道場に行く機会があって、そこで神社の方の日常に「祈る」ということが染みついている姿を見たのです。人間本来のあり方だなと感銘を受けると同時に、私もそういう風に生きたいと思いました。そして自分の生活を振り返った時に、私にとっての祈りは、絵を描くことなんだと気づかされたのです。

家に帰って、今までの自分の作品をみると、すごく違和感を感じました。現代美術を意識して、新しいことをやってみようとか、評価されたいという気持ちの作品だったと思います。もっと自分の内側から発揮したいという気持ちが湧いてきて、群馬県立近代美術館へ提出する予定だった作品も大きく変更しました。

私の実家は福島県いわき市で漁師を生業にしています。私はそういう環境で育ったので、自然と生活の中に祈るということがあったように思います。父が時化の海に漁

受賞作家によるアーティスト･トークで本江邦夫審査委員長とトークする小野さん

に出た日は、残された家族はただ無事を祈って待つしかないのです。そして、魚の命を頂いて、自分たちが生活しているという意識をもって育ちました。そういうことと絵を描いていることが、今、やっとつながったような気がしています。

■海での体験がモチーフになった

今回の作品は、自分の原点に戻ったような部分があります。学生時代、コップと貝殻を並べてブルーの静物を描いたことがありました。その頃は漠然とただ好きなモチーフを並べて描いたのですが、描き続けることによって身に付いた技術と表現力がプラスされ、違ったカタチで作品として残せるようになったと思っています。今、私の育った環境がアイデンティティに大きな影響を与えていることを実感することができ、今まで見えそうで見えなかった、表現することの意味や理由がみつかったような安堵感を覚えています。「ハジマリノザワザワ」と題したこの作品は郷里の海での体験

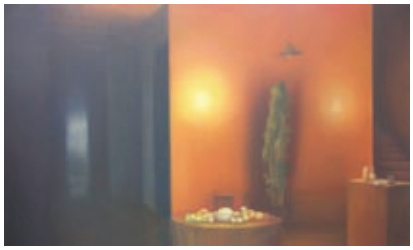
『群馬青年ヴィエンナーレ2010』大賞受賞作品　　モノガタリノアト（組み作品）　油彩　キャンバス　145.5×145.5cm　2010年

がベースになっています。海で海草を採取していたときに一匹の蟹を見つけて、家に持ち帰りました。次の日にその蟹が死んでしまっているのを見て、大きな罪悪感が襲ってきました。その時にザワザワと嫌な感覚がしたのです。蟹の目の奥にあった生命や自然のように大きく深い光のようなものをグレーに濁らせてしまったのです。その後悔の想いがザワザワという感覚を与えたのだと思いました。私は自分の償いや懺悔の気持ちを祈りとともに表現したいと考え、お供え物を描きました。プラスチックケースの中の蟹の背中には、海藻が元気よく茂っています。一方、蟹は意味もなく死んでいます。私は命をもてあそんだことを神のごとく傍観しながら、後悔しているのです。

私は作品を描くとき、同時進行でいくつかの絵を描いています。たとえば、明るい作品と暗い作品の両方を並べて描くのです。どうしてかと聞かれると困るのですが、ひとつの作品にすべての想いを閉じ込めるのではなく、いくつかの作品で中和しながらそれぞれ表現したいというふうに思っています。

■絵を描き続けられることへの感謝の気持ち

今回のシェル美術賞の受賞作品の中で、オイル・オン・キャンバスの作品は7名中2名だけでした。私は器用じゃないので、ずっとこのスタイルでやりたいと決めています。私はリアル描写という細密画を鴫剛先生にご指導いただいたのですが、学生時代に「小野さんは絶対時間がかかるから」と言われました。私にとっては時間が重要な部分なのではないかと思っています。先生も「時間はみつけるしかない」とおっしゃっていました。時間をかけることはとても大切だと思います。


ダレモイナイヘヤ　油彩　キャンバス
97.0×162.1cm　2007年　（入選外作品）

ツツマレルオトコ　油彩　キャンバス
89.4×145.5cm　2007年　（入選外作品）

卒業制作のときは、本当に朝の7時から夜の10時まで、他のことはほとんど何もしないで1年間ずっと絵を描いていました。最後の1年にすべてを賭けようと思って、自分で決めてやりました。おかげで1年で7〜8キロ痩せました。でもあの集中力、あのやる気はあの学生時代じゃなければ出せなかったし、それが今の自分の自信にもつながっています。あの時間が私にとって重要だったと思います。

在学中、私がアルバイトをしようとしたら、学生は勉強するのが仕事なのだから、やってはいけないと両親から怒られました。そんな親って、今なかなかいないですよね。彼らは美術のことはよく知らないのですが、私を信じて応援し続けてくれています。今まで独りでがんばってきたと思っていたのですが、それがこの1年くらいでひっくり返ってしまいました。29歳で、この年まで絵を描き続けられていることは、みんなのおかげなのだということを実感しています。

■学生相談室での仕事に動かされた

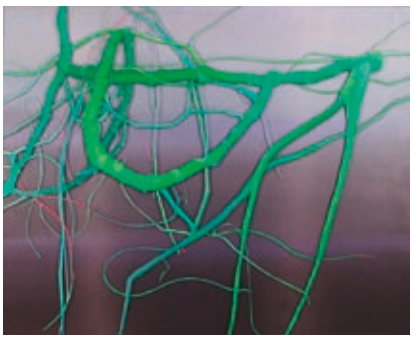
私が絵を描き続けていることの支えとして、学生相談室で働いていることも大きな意味を持っています。学生相談室というのは、本当は誰も来ないほうがいい場所です。みんなが学生生活を楽しんで、悩みがあっても仲間同士で相談できたり、目標を持てれば良いと思います。そうすると私の存在やこの部屋の意味はなんなんだろう、ということを考えるようになりました。今は、来ないですめばいい場所でありながら、あることによって救われるような場所なのではないか、と思っています。学生さんとの会話もとても大切です。私は専門家ではないので、どうしたらみんなを元気にできるのだろうと悩んだ時期もありました。いっそのことカウンセリングの勉強を始めようかとも考えました。しかしながら、私の役目はそういうことではないということに気づいたのです。私はみんなの先輩として、悩みながらも絵を描き続けて、その姿を見てもらうことの方が、いいのではないかと思っています。

学生の悩みには、このまま絵を描いていて作家の道はあるのか、ということがあります。私も10年間描き続けていて、もうやめようか、続けようか、常に悩んできました。でも続けてきて、努力も捨てたもんじゃないなと思っています。今までも一生懸命やってきましたが、これからもあきらめないで甘んじないで、選択を誤らないようにしたいです。どうして私だけ評価されないんだろう、と思っている人はたくさんいると思います。だけど描き続けているその自分を信じてほしい。本当にあきらめないでください。

ひかり　油彩　パネル
35.0×91.0cm　2002年　（学部2年次作品）

空　油彩　パネル
25.5×36.5cm　2003年　（学部3年次作品）

ゆめうつつ　油彩　パネルにオーガンジー
155.0×185.0cm　2005年　（大学院卒業制作作品）


メマイ　スルホド　ノカタチ　油彩　パネルにオーガンジー
132.0×163.5cm　2005年

今回の受賞という機会をいただいて、自分の絵画制作自体がある種の「祈り」の形として私なりに表現できるようにしていきたいと思っています。そして、このひとつの表現が多くの人の心に届くように、これからも表現活動を続けていきます。

Report・1 創立110周年記念式典を開催しました

11月3日、本学創立110周年の記念式典を有楽町朝日ホールで実施しました。

式典では大村智理事長からの式辞、佐野ぬい学長からの事業報告に続いて、本学の卒業生であり日本画家の故荘司福氏への名誉博士号授与、有限会社イワタ取締役の岩田嘉之氏への表彰、同窓会長佐藤和子氏への表彰、親子三代女子美である卒業生５組と、親子二代四姉妹女子美である卒業生１組への表彰がおこなわれました。また、卒業生で本学名誉博士である女優の奈良岡朋子氏による講演会、卒業生で本学客員教授である女優の桃井かおり氏からは祝辞をいただきました。

■ 授与式の様子

荘司福氏へ名誉博士号授与（代理受賞　荘司準氏）

女子美術大学同窓会長　佐藤和子氏

㈲イワタ　取締役　岩田嘉之氏

■ 親子三代女子美 受賞者

塚越璟子様、塚越ゆきぢ様、大政倫子様
石橋静枝様、寺岡和子様、伊勢かがり様
齋地房子様、奥野洋子様、奥野史子様
大村多美子様、坂入紀美子様、坂入美彩子様
田中下枝様、河田徳子様、河田あすか様

■ 親子二代四姉妹女子美 受賞者

中野スミエ様、中野和枝様、小田原裕紀子様、
増見富美江様、脇阪温子様

■ 客員教授・桃井かおり氏からの祝辞

どうも、桃井です。先輩の後にしゃべるのがどれだけプレッシャーか、少しわかっていただけると（笑）。奈良岡さんが卒業された51年に桃井は生まれました。うちの母が女子美に憧れていたらしいのですが、環境的にそんな状態ではなくて、娘が生まれたら女子美に入れたいと思っていたそうです。女子美での初めての授業の時に、西島先生が、「僕はプロになる人間を育てる教師ではない。美しいものをうまく食(いただ)ける女性を育てたいと思っています」っておっしゃったのが、なかなかいい言葉だなと思っています。美がわかる、おいしいものを見つけて食(いただ)ける人間。おいしいものを作れる人間。美しいものを作れる人間。美しいものに気付く人間。別にプロの職業人にならなくてもいい。生活の中にある美術も含めて美術はすごいぜという話をしてくださいました。それが女子美です。

今日、表彰された方々のお話を伺うと、結婚して一度絵を描くのをやめたけれども、また描き始める、そういう方がたくさん居られて。私もできたら長生きをして、2人生か3人生やれたらなと。それに、どうにか娘を産んで女子美に入れてみたかったです（笑）。今日は親子3代まで見届けましたので、今後も4代、5代と続けていただけるといいなと思います。私たち卒業した人間が、こんなに伸び伸びと生きていけているのは、たぶん女子美の先生方の教育の方針が相当いいからだと思います。女子美を代表するわけではないのですが、110周年を記念いたしまして、これからも女子美をよろしくお願いいたします！

■ 奈良岡朋子氏講演会

皆様こんにちは、奈良岡朋子です。今日は「講演」ということですが、私は役者ですから、台本をもらって、その台本に書かれてあることを覚えてしゃべることを仕事にしていますので、そう堅苦しいお話はできません。みなさんも気楽に、ちょっと一服という気持ちで聞いてください。

医者になるつもりが女子美へ

実は私は生まれてから戦後まで医者になるつもりだったんですね。それで女子医専―今の東京女子医大ですが―に入れるような当時の高等女学校を選んで入学しました。

ところが、第二次大戦のるつぼに巻き込まれまして、学校には行ったもののろくに勉強もできず、兵隊さんの無線機か何かこしらえて、「敗戦」を迎えました。さて、戦後のガラッと世の中が180度変わった中で、何も勉強していないので今さら女子医専に行くとか、医者になるということは考えられない。私は父から、物心ついたときからずっと、「俺が子どもたちに残す財産は何もない。大学までは行かせてやるから、卒業したら自立して、親をあてにするな」と言われ続けていたものですから、戦後すぐにどこか大学に入ることを考えました。でも、学費にも教材にもお金がかかるわけです。そこで、私の父は絵描きだったものですから、美術学校に行けば、父の絵の具などすべて拝借できるなと。そういう考えで女子美に入ったんです。

絵を描くことは子どもの時から日常茶飯事でした。3食の食事をとるのと同じようにずっと絵を描いてきたものですから。でも女子美へ入ると、良かったなと思ったのも束の間、授業でデッサンからやらなければならないことが不満でした。若いですからちょっと傲慢なところもあって、「今さら何でアグリッパの石膏を描かなきゃならないんだ」と。それよりも早く油を描かせてほしいとかって思っていたのです。その一方で、当時は部活に必ず入らなければならず、舞台装置をやるつもりで演劇部に入りました。あるとき、慶應大学の演劇部と合同公演をやることになりました。内村直也さんの『秋の記録』という芝居で、家族4人と娘の恋人という5人だけの1幕ものの芝居だったんですが、なんせ初めて慶應の学生さんと一緒にやるというので、みんな年頃ですから、娘役をやる人はいるけど、お母さん役をやる人がいない。それで、入部したての一番ペーペーの私がお母さん役をやらされました。

その当時私は新派とか歌舞伎とか、観る方では芝居に凝っていたんです。それでお母さん役を与えられた時に、たまたま新派の芝居を見にいったら、川口松太郎さんのお書きになった『風流深川唄』で、花柳章太郎さんがおせつという役を女形でやっていらして、長蔵っていう板前の役を確か伊志井寛さんか、大矢市次郎さんかがなさっていたんです。そのおせつが、自分の恋人の長蔵のために、長火鉢でお燗をつけるんですね、赤い銅壺に。それで、「長さん、一杯どうだい？」って言った時に、そのお燗を持ったら熱かったんで、パッと耳たぶに手がいったんですね。それを見て、さすがにうまいことやるなあ、なんて思っていたのが頭にインプットされていたので、『秋の記録』でお母さん役をやる時に、娘の恋人が訪ねてきてお茶を入れてあげる場面で、火鉢の上の鉄瓶をパッと持った時に、「熱い」っていうんでパッとこう耳たぶに手がいったんですね。そうしたら、あいつ芝居心があるんじゃないかって先輩が妙な認め方をしてくれて。

出来心で劇団民藝を受験

第2弾がジュリアン・リュシェールが書いた『海抜三千二百メートル』という翻訳劇でした。私は翻訳劇を観たことがなかったので、劇団民藝のやっていたドイツのシラーの作品『たくみと恋』というのを薦められて観にいきました。当時は、テレビもない時代ですから、映画が非常に盛んで、『たくみと恋』を観にいく前に、『安城家の舞踏会』という映画を観に行ったのですが、森雅之という人が出ていまして、それまでの映画スターにはない非常に魅力的な俳優さんだったんですね。その後、『たくみと恋』を観て、そのパンフレットを見たら、森雅之さんの名前があったわけです。そしてそのパンフレットの一番最後のところに、「劇団民衆芸術劇場養成所生徒募集」という小さな囲みがありました。それで、「この試験を受けに行ったら、森雅之さんっていう人が、きっと審査員で来ているんじゃないか、見られるんじゃないか」と思って、その程度の感覚で試験を受けたんです。そのとき受験生は500人以上いたんですが、気がついたら私は受かっていました。私はただほんの出来心で受けただけでしたが、断るのももったいないような気になったんですね。父は最初反対しましたが、兄が後押ししてくれたおかげで女子美を辞めないという条件で許可してくれました。

その後、51年には卒業して、女子美の卒業証書を持って父のところに行くと、これから先、絵を取るか、芝居を取るかと聞かれました。それまでずっと父の背中を見ていて、1人でやる仕事の孤独感みたいなものも感じていたので、「大勢でやる仕事がしたいから、芝居の方をやります」と答えると、父からは「ああ、いいよ、じゃあ今まで描いてきた絵の具箱を全部こっちに渡しなさい」と。子どもの時からずっと描いてきた油絵の絵の具箱を父に渡しました。それ以来、一切絵は描いておりません。絵を描くということは楽器やスポーツやなんかと同じで、毎日毎日描いていなければ、絵筆が動かなくなる。油も乗らなくなる、筆が滑らなくなる。それを自覚していましたし、「趣味でやることは許さない」と言った父の言葉が、いまだに私の胸には深く残っています。だから、今も絵は描けないけれども、芝居一本に絞ってやってきています。

私の後輩「ぬいちゃん」

今の女子美の学長でいらっしゃる佐野ぬい先生、この方、私の言葉で言わせていただきますと「ぬいちゃん」は青森県の弘前の高等女学校の私の後輩なんです。私が女子美に入った後から女子美に入ってきたんです。そのぬいちゃんが、今や学長さんまで上りつめて、片やいい絵を描いていて、羨ましいですよ。すごいバイタリティだと思います。だから私は女子美の卒業生っていうことをとても誇らしく思っています。津軽の言葉で「じょっぱり」っていう言葉があるんですが、非常に我慢強くて根性があるっていうことなんですね。ぬいちゃんも、そしてどちらかというと私も非常にじょっぱりです。それがなかったら、ここまで一つの劇団でやってこれなかったと思うんですね。でも、それもこれも今にして思うと、すべて出会いの積み重ね。今日もそうなんですけど、一期一会の積み重ねで、今の私があるんだなって思います。

Lecture 1

創立110周年記念イベント「三岸節子没後10年」記念シンポジウム

ゲスト：
三岸　太郎　氏（三岸節子画伯の孫・高輪画廊代表取締役）
司　会：
東　真理子　氏（朝日新聞社文化事業部企画委員）

パネリスト：
野見山暁治　氏（洋画家・東京藝術大学名誉教授・文化功労者）
土方　明司　氏（美術史家・平塚市美術館館長代理）
佐野　ぬい　氏（洋画家・女子美術大学学長）

10月24日、創立110周年記念事業の一環として、本学を代表する卒業生の一人である三岸節子画伯の偉大な業績と人柄に触れる「三岸節子没後10」年記念シンポジウムを相模原キャンパスで開催しました。画伯とゆかりのあるパネリストとともに、三岸節子の生きた時代背景と画業への高い志を垣間見る、素晴らしいひとときでした。

「自画像」(1925) ©MIGISHI
一宮市三岸節子記念美術館所蔵

女子美時代から最初の渡仏、帰国まで

東：節子さんは、高校卒業後上京して洋画家の岡田三郎助に師事し、女子美に編入します。女子美を首席で卒業し、新進気鋭の洋画家、三岸好太郎と結婚。翌年、20歳で長女を出産し、その2か月後に春陽会第3回展に「自画像」を初出品、女性として初めて入選しました。節子さんが29歳のときに好太郎氏が死去し、1954年に49歳で初めてフランスに渡ります。息子の黄太郎さんを先に留学させ、半年後に自分も渡仏して車を買い、ヨーロッパを走り回ったそうです。

三岸：祖母には生まれながらの股関節脱臼というハンデがあったので、いろいろなところへ行くためにわざわざ車を買ったのだと、父の黄太郎が言っていました。

東：野見山先生は1952年から1987年までフランスに滞在していらして、節子さんとパリでお会いになったのですよね。

野見山：フランス滞在時はお金がなく、ある日、モンマルトルの裏の坂道で売り絵を描いていたところに一台の車が通りかかったんです。窓を開けてしばらくこちらを見ているので、買ってくれるのかと思ったら節子さんで、「いつまで描いてるの？今晩ごちそうするわよ」と言って食事に連れて行ってくれました。あのときの温かいコーヒーは、本当にほっとする味でしたね。節子さんは当時49歳、それなりチャーミングな方でした。

東：最初の渡仏から1年半後に帰国した節子さんは、好太郎氏の遺作220点を北海道に寄贈します。

土方：その仲立ちをしたのが私の父です。父は三岸好太郎夫婦の絵を研究していたので、節子さんとも仲がよかったんです。子どもの頃、父が交渉のため北海道の役所に電話で怒鳴りつけているのを聞きました。

東：当時、節子さんもぼやいていたようですが、役所は絵の評価額ばかりを気にして、なかなか作品の値打ちを理解しなかったそうですね。生前の節子さんを知る人はもう少ないですが、土方さんのお父様は土方定一という有名な美術評論家で、節子さんの一つ年上の1904年生まれです。贈呈式に、当時6歳の土方さんも連れて行ってもらったそうですね。

三岸：土方さんのお父さんがいらっしゃらなかったら、札幌の三岸好太郎美術館もできていなかったでしょう。

野見山 暁治 氏

ヨーロッパでの生活と苦悩

東：節子さんは63歳で再びフランスへ渡ります。そのときも、息子の黄太郎さん一家を引き連れていきました。黄太郎さんは節子さんのマネージャー的な仕事をこなしながら、自らも絵描きでした。節子さんも息子さんと旅行して絵を描いて、刺激されるものがあったように思います。感性が若いのは、息子さんの存在が非常に大きかったのではないでしょうか。

野見山：黄太郎さんがいかに絵が好きでも、辛かったのではないでしょうか。どこに行っても両親の名前が出されます。もし私の父親が三岸好太郎で母親が三岸節子だったら、どうしたらいいのか見当もつかなかったのではと思います。

三岸：父が最初に就いた仕事は、映画の助監督だったんですよ。その後、建築家も志しますが、結果的にはフランスに行って絵を描くことになりました。確かに大変だったろうと思います。

東：節子さんは、自分中心の人ですよね。2度目の渡仏の際も、自分一人では海外で生活できないので息子夫婦一家も連れて行って。

三岸：そのぐらいでないと、絵描きにはなれないでしょうね。家族全員が祖母の絵のために毎日生きて、父も母も僕も犠牲になって。ただ、結果的に祖母が良い絵を発表できて、売れることができたのは本当に嬉しかったです。父が普通のサラリーマンや、それこそ監督になっていたらできなかったと思います。

土方：一見、傍若無人に周りを犠牲にして生活しているように見えますが、節子さんは一人の人間の中で、振幅の大きい人なんです。常に自分を追い詰め、自分に自信が持てないところをさいなむ面も持っている。80歳を超えてなお新しいスタイルを生み出す力を持っている日本人画家は、恐らく他にいないでしょうね。

東：佐野学長が節子さんに初めてお会いになったのは1969年で、先生が37歳、節子さんが64歳のときだそうですね。

三岸 太郎 氏

佐野：初めてお会いしたのはニースのホテルで、女子美の「美術の旅」という団体旅行でヨーロッパに行ったときでした。当時、節子さんはその近くのカーニュという街に住んでいらっしゃいました。「あなたは女子美の後輩だから頑張ってください。たくさん絵を描きなさいね」と励ましていただきました。

東：節子さんは約20年間のフランス滞在で、「ヴェネチア」、「スペイン」をテーマに個展を開きましたが、その次は「パリ」を描こうと思っても、絵葉書みたいな作品しかできないと悩んでいましたよね。

三岸：絵描きが多すぎるんです。どこを描いても誰かの絵に似てしまう。それで、マンションを借りてパリのいろんな季節を見ながら研究していたようです。

野見山：私がパリに渡ったばかりの頃、後に評論家となる加藤周一氏から、最初の1年は絵を描かずにいろんな作品を見たり、この国、この土地になじむようにとアドバイスされました。しかし、むしろ日本に帰ってきた時の方が、絵が描けなくなったのです。これがカルチャーショックかと、フランスに戻らなくてはと思いました。

土方：戦前から戦後にかけての画家が誰しも体験することだと思います。それをどう乗り越えるかによって、表現として取り込むことができるのではないでしょうか。

野見山：風景よりも人間関係かもしれません。フランスでは言葉も通じないし知らない人ばかりなので、人間関係に悩まされることもありませんが、日本はそうもいかない。面倒な付き合いもあります。パリに慣れてしまうと日本に違和感を覚えてしまい、絵が描けなかったのだと思います。

絵を描くことは自己表現の闘いである

東：三岸節子という画家が描く作品や、画業に対する姿勢について、皆さんはどんな思いを持っていらっしゃいますか。

佐野：同じ女性だからでしょうか、節子さんの作品を遠くから見ると、私の絵の構図と色彩が、似てしまっているものがあります。ベニスに絵を描きに行って構図を取ったら、かつて節子さんがベニスで描いた絵が思い浮かんでくるのです。別の場所へ行っても同じで、自分の絵にはならないのです。どこを考えても、どんなことをしてもかなわない、だめだと思いました。

佐野 ぬい 学長

東：先日刊行された三岸節子日記*には、15歳のときに家が倒産したので、絵描きになって家名を取り戻そうと思ったとか、ご主人の好太郎が亡くなったときも「これで絵が描ける」と思ったり、洋画家の菅野圭介と恋をして、結局は裏切られた時自分には絵しかないとヨーロッパに行った。作品がどんなに売れるようになっても、それに満足できない部分があったのでしょうか。

野見山：節子さんの時代は女性が社会で認められておらず、女性の絵描きはほとんどいませんでした。頑張っても「あれは女が描いたものだ」と言われ、世間の評価は低かった。それで負けてなるものかという気持ちが強く、抵抗の中にいたのだと思います。自分を表現する闘いだったのですね。

「エッフェル塔」(1985) ©MIGISHI
女子美術大学所蔵

東 真理子 氏

佐野：いかに一人の人間として生きることが大事かというのは、節子さんのみならず我々一人ひとりにもあることなんですよね。

三岸：祖母は美術学校に呼ばれて、何度か学生の絵を指導したことがあるのですが、目をつけた学生に必ず言っていたのが「そろそろご自分の絵をお描きになったら」ということです。最終的には自分しかない。自分の作品になるべく早くつながったらいいと思っていたのだと思います。

土方 明司 氏

野見山：絵描きというのはすべて自分次第、定年も退職もありません。私もまだまだ頑張らなければと思いますよ。

次の世代へのメッセージ

佐野：若い人には、積極的に何事にも挑戦していってほしいですね。完璧はあり得ないので、大体でいいのではないでしょうか。それは、いい加減ということではありません。大体大きくものを見ると、幅も出てやりたいことが出てくるものだと思います。今、私は、女子美術大学創立110周年を記念して「110の夜（nuit）を越えて」という個展も行っています。巡回もしますので、卒業生の方たちにも来ていただけると思っています。

三岸：若い世代にも三岸節子を知ってほしいと、展覧会やシンポジウム、日記の刊行などをしています。日記に関しては発表するつもりで書かれたものではないので刊行してよかったのかなと思うこともありますが、絵を描く上での苦労など、内面がよく表れていて参考になります。女子美で研究会を作ると面白いかもしれません。過去の偉大な作家がいるからこそ、今から頑張る人たちが出てくると思います。

土方：今は近代の作家の展覧会をしても、なかなか人が入らない状況です。三岸節子をはじめ、そうそうたる作家でさえも忘れられようとしています。それは、知るチャンスがないからだと思います。学校では美術の授業数が減らされ、美術史も扱っていません。日本のエリートサラリーマンは、パーティーの席で芸術の話になっても何も話せないのです。グローバル化が進む現代社会において、足元の美術を押さえていくということを、現場で何とかやっていってほしいと思います。

戦前は公立の美大への女性の入学は認められていませんでしたが、唯一この女子美だけは受け入れて、日本の美術史に貢献しました。そういう伝統の重みを若い方に継いでいっていただきたいと思います。

*『三岸節子　仏蘭西日記　カーニュ編（1968～1971年）』（2010年）
女子美アートミュージアムで販売中（2000円）

Lecture 2

創立110周年記念イベント シンポジウム『現代アジアの女性作家』

1900年に設立した本学には、広くアジアの各地から芸術を志す女性たちが集まり、多くの優れたアーティストを輩出してきました。

このたび創立110周年を記念して、ゲスト・スピーカーをお招きし、中国、台湾、韓国、日本の女性作家をテーマにした国際シンポジウム『現代アジアの女性作家』を行いました。このシンポジウムは、2003年に行った『戦前の女子美とアジアの学生たちの足跡』というシンポジウムの続編という位置づけになります。本学の歴史資料整備委員会委員長である原聖教授より、アジアの将来を担う学生たちに、歴史的な背景をふまえた上で現代の女性アーティストを理解してほしいとの挨拶を冒頭に、さまざまな視点からのお話や、貴重な画像資料を数多く紹介していただき、密度の濃いシンポジウムとなりました。

「植民地表象とリアリズム」

北澤　憲昭（女子美術大学教授）

現代アジアの女性作家について議論をするときに、植民地表象とリアリズムの問題を前提条件として考える必要があります。それには大きく三つの理由があります。第一に、現在の美術界におけるリアリズムの再評価の問題、第二に東アジアにおける造形の近代化は西洋からのリアリズムを受容することであった点です。そして第三に植民地はジェンダーのメタファーとして重要な意味を持っている点です。辞書的には、植民地とは経済的、軍事的に優位に立つ国家の侵略によって従属させられた地域、または自国民の移住と定住を促す国外の領土という意味があります。これは女性が一家の主婦として母として、長い間強いられた立場と通じるものではないでしょうか。言い換えれば男性が主体であり、女性が客体として扱われて来た歴史、これは主体による客体の支配というふうに考えることもできるのです。そしてこれはリアリズムそのものの問題でもあるのです。

アジアとは何かということを考える時、私は「膨張し収縮する概念」だと考えています。しかし、そのような茫漠とした概念ではなく、我々のいる東アジアについて、歴史学者の西島定生は1960年代に「東アジア世界」という概念を提示しました。その構成要素として、漢字、儒教、仏教、日常性という4つをあげています。この中で絵画ともっとも関わりの深いものは、漢字文化圏という点です。近代までは「書画」という言葉にあるように書と絵画がひと続きのものと考えられていました。東アジアではこの書画体制を否定的に乗り越えることから始まりました。それはすなわち、西洋のリアリズムを手本とする方向へ向かったのです。絵画の脱亜入欧、主観性への傾きというものを目指した東アジアの絵画がどこへ向かったのかを考えていく必要があると思います。

「中国の現代女流作家について」

楽 正維（ラ ゼンウェイ　何香凝美術館副館長）

周 思聡　「広島の風景」1986　172×243㎝

尹秀珍　「鞋子」（日本語:蘇る靴）1998

私は今回1970年代以降の中国女性作家と作品をご紹介します。清朝末期から民国の時代にかけて、中国で芸術を学ぶ方法は大きく二つの道がありました。一つは芸術大学に行くこと。もう一つは伝統的な芸術の作家に弟子入りをすることです。芸術大学は開放的な場であり、弟子入りをする世界は穏やかで保守的な芸術を追求する場でした。1949年以降ソ連の影響を受けた国家レベルの学校が運営されました。1950～70年代は社会主義体制でしたが、70年代の後半から中国の社会も解放的になり、多元化していきました。その結果、女性作家たちの新しい時代が訪れたのです。彼女たちに共通している点は、創作の源が具体的な生活の中にあるということです。

周思聡（1939～1996）は、清朝の美術教育を受けて画家になった人です。山水画や人物画の技法を学びました。女性特有のきめ細かさを持ち、歴史観と時代に対する責任感をもって絵を描いていました。1986年に広島を訪れ、広島を題材とした作品を残しています。尹秀珍（1963～）は現代のアーティストです。さまざまな国際展にも参加しています。彼女は作品の中に自分の経験をこめています。かつて自分が着た衣服のようなソフトな素材を使って作品をつくり、インターナショナルなメッセージを発信しています。

「台湾の現代女流作家について」

黄 光男（ファン クワンナン　台湾芸術大学学長）

台湾の芸術史は日本の統治時代の影響を受けています。当時日本国籍の教師によって教育が行われていました。彼らによって水彩、油絵、東洋画、彫刻などの分野に台湾独自のすばらしい作品が現れました。統治時代には女子の美術学校がなかったため、後に台湾を代表する女流画家の陳進（1905～1998）は、女子美術大学の前身である女子美術学校に進学しました。1950年代以降、台湾の美術界は欧米文化の影響を受けた現代抽象派と中国本土への回帰を目指す写実芸術を目指す二つの流れがありました。

1960年代になると、台湾の美術界は現代化運動の時代になりました。中国と西洋

陳進　「悠閒」1935　161×136㎝

の美学理念を融合させると同時に前衛精神を掲げました。袁旃（1941～）は師範大学美術学科を卒業し、同時代の女性作家とともに活躍しました。彼女は伝統的な水墨画に対し形と色彩に新しい発想を取り入れ、山水画の新しい境地を拓いた作家です。

1980年代以降、民主化に伴い教育レベルが上がりました。作家たちは盲目的に西洋の表現様式に追従するのではなく、独自の創作活動を行うようになりました。多くの女性作家がコンペティションで受賞するようになっていきました。抽象的な作品をつくる作家が増えてきたことも特徴です。頼純純（1953～）は生き生きとした色彩を用い、社会文化の現象を反映した作品を発表しています。

頼純純 「心器」 1997

「韓国現代美術の女性作家たち」

金 惠信（キム ヘシン　学習院大学非常勤講師）

韓国の多くの美術館では閉館1時間前になるとタダになるので、私はよく大急ぎで鑑賞していました。今日は私の駆け足ガイドツアーにおつきあいください。

ナ・ヘソク（1896～1948年）は韓国最初の女性洋画家です。彼女は1913年から1918年まで私立女子美術学校の洋画部で学びました。彼女は最初の日本留学生、最初のパリ留学生でした。夫は外交官で夫の赴任に伴い満州でも暮らしました。画家としては朝鮮美術展覧会で何度も入選の実績があります。また同時に韓国で最初にフェミニストの考えを文章にした作家でもありました。18歳の時「理想の婦人」と題した文章に、良妻賢母だけでなく良夫賢父

ナ·ヘソク

と一緒にあればいいだろうということをわかりやすい言葉で率直に書いていました。自分の個性を発揮しようという自覚のある婦人でありたいということを記しています。

その後に続いたのが、パク・ナムスン（1904～1994年）、パク・レヒョン（1920～1975年）、チョン・キョンジャ（1920～1875年）で、彼女たちも女子美術専門学校の卒業生です。彼女たちは非常に優れた作家でした。パク・レヒョンは朝鮮美術展覧会で総督賞を受賞し、さらに戦後にも第5回大韓民国美術展覧会で大統領賞を受賞しました。

パク·レヒョン 「露店」 1956
第5回大韓民国美術展覧会大統領賞

イ·ブル 「受難遺憾－わたしを散歩に出た仔犬だと思うの？」
1990　成田空港から東京都内のパフォーマンス

今活躍しているイ・ブル（1964～）はパフォーマンスの作品で表現を行っています。彼女は独創的な身体表現を用いて、現代の身体に対するさまざまな問題を投げかけています。今回紹介した昔と今の作家たちは一見伝統的であったり、前衛であったり、大きく異なるように見えますが、実はその作品はそれぞれの時代のコンテンポラリーを表現しているのではないでしょうか。

「日本の女性アーティスト 境界線上に立って —90～00年代に生きる女性の表現」

小勝　禮子（栃木県立美術館学芸課長）

私は美術館の学芸員としてこれまでジェ

綿引 展子 「伸ばした手だけが並ぶ静寂」 2009
布、水彩、カンヴァス

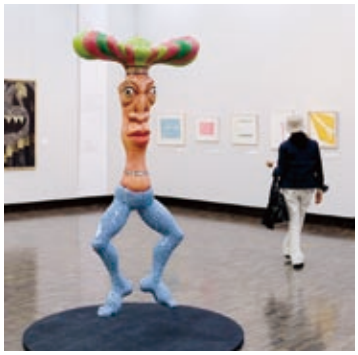
井上 廣子 「Inside-Out」 2010
写真、インスタレーション
「イノセンス展」（栃木県立美術館）の展示

ンダーの視点から女性画家の展覧会を企画してきました。1997年には「揺れる女／揺らぐイメージ」展で、19世紀のフェミニズムの誕生から現代までを視野に世界と日本のアートを紹介し、2001年の「奔る女たち」展では、1930～1950年代に活動した日本の女性画家を発掘紹介しました。この展覧会では出品作家の3分の1以上が戦前の女子美術学校の卒業生で占められたことが注目されます。2005年に開催した「前衛の女性　1950－1975」展では、戦後の前衛美術運動に参加した女性アーティストをめぐる問題を明らかにしました。

本日の講演では、「境界線上に立つ」という視点から現代日本の女性アーティストの新しい表現を紹介します。民族・宗教・国境·セクシュアリティ·正常と異常など、内と外の境界線上で危うい均衡を保ちながら制作する作家たちです。他者の痛みやその記憶をどう伝えるのか、その伝達不可能性に誠実に向き合う作家もいます。彼女たち自身がマイノリティの側に軸足を置いていることが自覚されています。綿引展子（1958～）は、生きることに不器用な自分が社会や他者との間にかもす齟齬や軋みを独特の不気味さやユーモアのある作風で表現します。井上廣子は阪神・淡路大震災を契機に、隔離された人間の心の痛みや人と人を隔てる境界をテーマに制作しています。ほかに、イケムラレイコ（1951～）、呉夏枝（オ·ハヂ）（1976～）、阪田清子（1972～）、山城知佳子（1976～）らもそれぞれの抱える境界に向き合っています。

Report ・2 創立110周年記念展覧会・イベント報告

■女子美パリ賞受賞者展
「パリで暮らす、つくる。」
2010年9月17日～10月24日
（女子美アートミュージアム）
2000年から現在までに本学のパリ賞を受賞した10名の卒業生のアーティストを紹介しました。



■佐野ぬい展
佐野ぬい学長の巡回展を全国の高島屋で行いました。
（日本橋）2010年10月 6日～10月12日
（横浜）2010年10月20日～10月26日
（大阪）2010年11月10日～11月16日
（京都）2010年11月24日～11月30日
（名古屋）2010年12月22日～12月31日

■八咫鏡の女流作家展
2010年10月17日～2011年2月27日
（韮崎大村美術館）
2007年に本学の大村智理事長が設立し、韮崎市（山梨県）に寄贈した「韮崎大村美術館」において、著名な18名の卒業生の女流画家たちの作品が一堂に会しました。

■同窓会企画展「予期せざる出発」
2010年10月29日～11月10日
（有楽町朝日ギャラリー）
「予期せざる出発」をテーマとして女子美の卒業生と在学生から作品を公募し、入選したものを展示しました。キュレーションは本学卒業生のキュレーター、真子みほさんによるものです。

■「版画展ー女子美卒教員によるー」
2010年11月22日～11月27日
（ギャラリー銀座アルトン）
版画家として活躍している卒業生（清水美三子、馬場知子、小越朋子、八木なぎさ、白木ゆり）の企画展を行いました。

■乗松巌生誕100年
彫刻家のデッサン展
2010年10月16日～10月31日
（乗松巌記念館エスパス21）
本学名誉教授の乗松巌の生誕100年の記念展に本学が協力しました。

■テキスタイル・パフォーマンス
「合縁奇縁」
2010年10月28日
（イーストギャラリー B1ホール）
短大デザインコーステキスタイルデザインの学生たちによって布の表情と身体表現の融合で魅せるパフォーマンスが行われました。

■『二つの星』（美術の窓）単行本化
2009年6月号から2010年9月号まで美術の窓に連載した『二つの星－横井玉子と佐藤志津　女子美術大学建学への道』（山崎光夫著）が講談社エディトリアルによって単行本化され刊行されました。

（講談社エディトリアル）

■女子美術教育と日本の近代
女子美110年の人物史
本学の歴史資料充実・110周年史編纂部会のもとで、本学設立の背景にある幕末から明治にかけて活躍した先進的な人物群像の動向などを描いた、本学に関わった人々を紹介する列伝を出版しました。

（日本エディタースクール出版部）

NEWS・1 林 規章教授 ADC賞受賞

スクリーンに投影された「ブルーノ・ムナーリの本たち」

芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻 林規章教授が「ブルーノ・ムナーリの本たち」（ビー・エヌ・エヌ新社）の装丁デザインでADC賞を受賞し、12月6日、帝国ホテルにて授賞式が行われました。ADC賞は、東京アートディレクターズクラブ（ADC）が、1年間に発表されたあらゆるジャンルのデザイン作品の中から優れたものを選出する、日本のデザイン界で最も権威ある賞のひとつです。日本のデザイン界を牽引するアートディレクターで構成されたADC会員、全員が参加し審査を行う、世界的にも珍しい審査方法をとります。授賞式では、ADC細谷巌会長より、各賞の授与が行われ、「全ADC会員が自らの目で確かなものを選出するこの賞に間違いはない。受賞者はこの賞を大きな自信とし、作品を作り続けてほしい。」と挨拶がありました。

授賞式を終えて、林教授は「学生時代からあこがれ続けてきた、自分自身にとって特別な賞。今日、ここに立つことができて本当にうれしい。ノミネート、プレノミネートも含めるとこれまで10回、念願の受賞です。受賞作品の題材でもあるブルーノ・ムナーリは、誰もが知る、あまりにも偉大な方だったため、当初は戸惑いもありました。彼に対して様々な想いがある中、逆に自分らしく素直に表現しようと。この仕事に出会えたこと、作品に出会えたことは本当に幸せです。そして、こういった賞が少しでも女子美生の刺激になってくれればいいなと思っています。」と喜びを語りました。

NEWS・2 杉田 敦教授 ポルトガル文化功労章 叙勲

このたび、芸術学部美術学科芸術表象専攻の杉田敦教授が、ポルトガル大統領より文化功労章にあたる" da Ordem do Merito "を叙勲されました。今年は日本ポルトガル修好150周年にあたる年です。勲章はこれを記念して両国の文化交流に功績があったと認められた日本人11名に贈られ、10月25日には在日ポルトガル大使公邸で叙勲式が行われました。杉田教授は過去にポルトガルを代表する建築家アルヴァロ・シザ・ヴィエイラの展覧会を企画されたり、「白い街へ」（彩流社）「アソーレス、孤独の群島」（彩流社）といったポルトガルに関する著作を発表されています。また、今年、6月から8月にかけて本学の女子美アートミュージアムで開催されたポルトガルの現代美術を紹介する展覧会「the age of micro voyages -極小航海時代-」の企画を担当されました。

NEWS・3 公募展 受賞者紹介

第23回 日本の自然を描く展（上野の森美術館）

入選

内田 美香（大学院修士課程洋画研究領域1年）

第64回 山口県美術展覧会 つくる（公募部門）

入選

内田 美香（大学院修士課程洋画研究領域1年）

第74回 新制作展

新作家賞

髙田 文（大学院修士課程立体芸術研究領域1年）

シェル美術賞2010

入選

戸田 沙也加（大学院修士課程洋画研究領域1年）

国際瀧冨士美術賞

第31期奨学生

谷中 美佳子（芸術学部絵画学科日本画専攻4年）

第46回 神奈川県美術展

［工芸部門］

特選

北浦 希容子（芸術学部立体アート学科4年）

入選

松井 香楠子（大学院修士課程立体芸術研究領域2年）

塩﨑 遥（大学院修士課程立体芸術研究領域1年）

桂 沙依香（芸術学部立体アート学科4年）

黄 美眞（大学院修士課程工芸研究領域1年）

第16回 真綿のヴィジュアル・アート展

入選

髙田 文（大学院修士課程立体芸術研究領域1年）

［平面・立体部門］

奨励賞

小池 いずみ（大学院修士課程洋画研究領域2年）

美術奨学会賞

髙橋 彩（芸術学部立体アート学科4年）

入選

小泉 千織（大学院修士課程洋画研究領域1年）

清水 香帆（大学院修士課程洋画研究領域1年）

室町 克代（大学院修士課程洋画研究領域2年）

朝倉 優佳（芸術学部絵画学科洋画専攻4年）

Report ・3

芸術学部アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域
イルカ客員教授特別講義

昨年4月、本学卒業生でシンガーソングライターのイルカさんが芸術学部アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域の客員教授に就任されました。11月までの間に3回の特別講義があり、学生たちは音楽活動にとどまらない幅広い分野でのイルカさんの活動に触れました。ここでは2回目の講義の一部をお伝えします。

今回は2回目の講義ですが、今年は国際生物多様性年という年なので、私の紹介も兼ねてこの話をしたいと思います。国際生物多様性年というのは、国連が定めた年です。私は2004年からIUCN＝国際自然保護連合の親善大使を務めております。この「生物多様性」という言葉が非常に分かりにくいので、これを一般の皆さんに分かりやすく広めてほしいと言われています。IUCNは世界中の国や政府や、環境問題を扱っているNGOや学者さんが加盟している連合なのですが、60年以上の歴史があります。今、絶滅危惧種と言われているような生き物たちが増えていて、どれ一つが欠けても本来ならこの地球は成り立たないはずなのにどんどん生き物が絶滅しているという状況があるんですね。それをもっとみんなに知ってもらうために、毎年レッドリストというものを作っています。

IUCNの親善大使になった時に、私はこのことをもっとみんなが知っていて、そしてお金もあるのだろうと思っていたら、ほとんどの人が知らなくて、お金が一銭もなかったのです。蓋を開けたらオフィスもないし電話もないし、誰も協力してくれる人がいない。私、たった1人でした。どうやって活動していこうかと考えたときに、まずはそれまで英語のものしかなかったリーフレットの日本語版を作ることにしました。外務省に行きまして、「お金を貸してください」というお願いをすることからこの活動は始まりました。そして外務省から印刷代と紙代を借りてきて、このリーフレットを作りました。それも単に印刷したものを作ってもみんな読んでくれないでしょ。何か引っ掛かるものを作らないと。それには絶対にわかりやすいものであることと、パッと見て綺麗だなと思うもの、真善美を兼ね備えたものを作らないと、と考えました。そうやってできた1枚なので私にとっては本当にいとおしい存在なんです。これは私のコンサートにいらした方皆さんに差し上げているのですが、毎年何千部も作らないといけないので、私のコンサートには募金箱を置かせてもらっていて環境問題に関することに賛同してくださる方に、募金をしていただいて、そうして集まった募金でこれを作っています。

日頃こういう活動に対しては、みんな「いいことですね」とは言ってくれますが、いざそれに賛同してくれるかというと、尻込みされてしまったり、資金がないと言っても、じゃあお金を出しましょうと言ってくれる企業がまだまだ日本では少ないです。海外はそういったことに関してもかなり地盤ができてきています。CMにお金を使うより、「こういう環境問題に賛同しています」と寄付した方が、企業イメージがアップすることもあると思うのですが・・・。

生物多様性に関しては、「生物多様性条約」という条約があります。その10回目の会議「生物多様性条約第10回締約国会議」通称「COP10」というものが、今年の秋に名古屋で行われます。私は、今年の3月に初めてスイスのジュネーブにあるIUCNの本部に行ってきたのですが、その時に秋のCOP10に向けて、イルカはどういう活動をしているのかと聞かれました。そこで私は三つのことをやっていることを伝えました。一つはアルバムを作ること。私はミュージシャンなので、言葉より何よりも、まず音楽で自分のメッセージを聞いてもらいたいと思っています。今までずっとそういう活動をしてきたので、やっとこういう年が来たんだなという気がして『森羅万象』というアルバムを作りました。『森羅万象』というのは、この宇宙のすべての生き物たちという意味です。もう一つは、そのアルバムを中心に1年限定のコンサートをやること。タイトルは『まあるい地球コンサート』と『明日の君へコンサート』というもので、1年間で80か所ぐらいのツアーをやります。そしてもう一つは、絵本を描くこと。私にとっては6冊目の絵本なのですが、幅広い世代の人に生物多様性を知ってもらいたいと思った時に、音楽と絵とお話という部分で表現したいなと思い、「まあるいいのち～ノエルの不思議な冒険」という絵本を創りました。

それともう一つ、自分のコンサートツアーとは別に、大きなコンサートを三つ企画しています。一つは5月22日の国際生物多様性の日にやりました。日本のフォークと言われている世代の私の親しい友達を招いて、「イルカ with フレンズ」という形でおこなうコンサートです。5月には津山でやりました。そして7月25日には山梨県、富士河口湖町でやります。そしてCOP10の開催期間中に、名古屋でもコンサートをやります。環境問題のコンサートというのはチケットの売れ行きが心配だったんですが、即日完売ということで本当にうれしいなと思っています。

これらのコンサートはすべて「イルカプロデュース」です。私は自分のコンサートも自分で全部プロデュースしています。ですから、私にはプロデューサーがいません。ヘアメイクさんもいないし、コスチュームのデザイナーもいないんですね。パンフレットづくりから、出演者への依頼、お礼状書き、メッセージのお願いなど、多種多様な仕事がのしかかってくるんですが、そういうことも嫌いではないので、楽しくやっています。いつか皆さんの中から、一緒に仕事ができる人が出てきてくれたらうれしいなと思っています。学生さんのうちからでもいいなと思っているので、何か私の仕事を一つの実験室のようにして、みんなとプロジェクトができたら面白いかなとも思っているんです。

イルカさん作成の日本語版リーフレット

Topics 1 芸術学部アート・デザイン表現学科主催 連続公開講座「宇宙・人間・アート」を実施

芸術学部アート・デザイン表現学科は、9月から全14回にわたり、「宇宙・人間・アート」と題した連続公開講演会を開催しました（主催：同学科、後援：杉並区文化協会）。宇宙から地球を眺める視点で人間とアートを広くとらえ、考えていくことを目的としてスタートした講座です。本学の教授陣をはじめ、様々な分野の著名人を招き、会場には学内外から多くの聴講者が集まる中、大盛況のうちに全講義が実施されました。

第1回「演劇の魅力を語る」（9月10日実施）

蜷川 幸雄　先生
（女子美術大学客員教授、演出家）

第2回「エジプト発掘の魅力　～エジプト調査隊・発掘レポート」（9月17日実施）

吉村 作治　先生
（早稲田大学名誉教授、工学博士）

第3回「日本の洋画壇をかざってきた女流画家たち」（9月24日実施）

林 紀一郎　先生
（美術評論家）

第4回「日本人の顔の過去、現在、未来」（10月1日実施）

原島 博　先生
（女子美術大学客員教授、東京大学名誉教授）

第5回「アニメが世界をつなぐ」（10月8日実施）

鈴木 伸一　先生
（杉並アニメーションミュージアム館長、アニメーション作家）

第6回「人は、なぜ宇宙から地球を見たいのか!」（10月15日実施）

為ヶ谷 秀一　先生
（女子美術大学大学院美術研究科教授）

第7回「ハリー・ポッターの舞台裏」（11月5日実施）

松岡 ハリス 佑子　先生
（翻訳家、静山社会長）

第8回「桃井かおりの世界」（11月10日実施）

桃井 かおり　先生
（女子美術大学客員教授、女優）

第9回「片岡球子の画業について」（11月12日実施）

草薙 奈津子　先生
（平塚市美術館館長）

第10回「ファッションの魅力とモノ創りの現場から」（11月19日実施）

山本 耀司　先生
（女子美術大学客員教授、ファッションデザイナー）

第11回「いのち燃え立つ時――「はやぶさ」の軌跡」（11月26日実施）

的川 泰宣　先生
（JAXA名誉教授・技術参与、NPO子ども・宇宙・未来の会 会長）

第12回「芸術と人生」（12月3日実施）

ファビエンヌ・ヴェルディエ　先生
（画家）

©alexandre Isard

第13回「顔と心のバランス　～外見の輝きは内面の美を創造する～」（12月10日実施）

小林 照子　先生
（美容研究家、株式会社美・ファイン研究所代表）

第14回「ぬいぐるみに出来ること」（12月17日実施）

落合 けい子　先生
（ぬいぐるみ作家、やまね工房代表）

詳しくはアート・デザイン表現学科 HP（http://www.joshibi.net/ad/ad/index.html）をご参照ください。

Topics 2 ルドヴィック美術館館長バルナバーシュ・ベンシュク氏特別講義

10月14日、相模原キャンパスにて、南嶌宏教授が担当する講義「表現発想法」にハンガリー最大の現代美術館であるルドヴィック美術館のバルナバーシュ・ベンシュク館長をスペシャルゲストとしてお招きし、特別講義が行われました。講義では、ハンガリーの政治的な歴史とこれまでのアーティスト、美術館の関係や、ルドヴィック美術館が国際的な現代美術を多く所蔵し、ハンガリーの美術館の中で重要な役割を担っていること、そしてこれまでの企画展の様子などが多くの画像とともに紹介されました。講義の終わりには質疑応答があり、学生が東ヨーロッパの現代美術に触れ、そして日本と東ヨーロッパの美術に関する関係性を考える貴重な機会となりました。

Lecture 3 仲條正義客員教授特別講義

仲條先生に講評していただく学生たち

10月17日、相模原キャンパスにて客員教授である仲條正義先生の特別授業がおこなわれ、デザイン学科の学生26名と聴講の学生が参加者しました。

授業参加者には事前に課題が出されていました。課題は“オリジナルキャラクター制作とキャラクターグッズの展開”。その際、「既存のものにとらわれず手を動かし制作すること。“キャラクター”制作という一見、女子学生が“かわいく”仕上げそうなものを、もっと踏み込んだ表現にすること。」という条件があげられました。

当日は絵本、映像、立体、刺繍などキャラクターをいろいろな形で表現した作品たちが並びました。仲條先生からは作品一点ずつに講評をいただきました。講評の中で、先生は課題であるキャラクターの考え方について言及されました。

●デザインとキャラクター

デザインは情報を整理すること、伝えたいことをしぼりこむことでもある。キャラクターも同じで、見る人によって感じ方が違うキャラクターをつくるという方法もあるが、かわいいとか、少しいじわるだとか、性格づけをすることによって方向性を限定していくことができる。誰が見ても同じに見えるから成立する、それがキャラクター。

●キャラクターと形の追求

キャラクターを作るとは輪郭にすること。頭で思い描いたことを実際に絵に描くとつまらない絵になってしまうかもしれない。でもそこであきらめずもっと描いて、ひとつの形がだんだん考えているものと近づいてくると、人にも伝わるし説得力のある形になってくる。それがキャラクターと言える。

講評終了後、仲條先生、講評会に参加された林規章先生、立花文穂先生、能見英子先生、川原真由美先生それぞれの先生方からグランプリと入選作品を選んでいただきました。課題に取り組んだ学生たちは、真剣な顔で先生のお話に聞き入っていました。

グランプリをとったヴィジュアルデザインコース2年 沼能茉紀さんと受賞作品
仲條先生のコメント：いいと思います。かわいいじゃない。色がいいんだな。考え方がCM的でもあるね。
受賞者のコメント：このたびはこんな素晴らしい賞をいただいて本当に嬉しいです。今回の制作にあたり、キャラクターとは自分の分身みたいなものではないかと考え、「自分に似ているけど自分ではない自分」をテーマに制作しました。

全員で記念撮影。仲條先生、ありがとうございました！

（写真撮影：寺林真代）

Topics 3 PENTAXと一眼レフグラフィックコンペ開催

11月17日、女子美アートミュージアムにて「女子美術大学× PENTAX　デジタル一眼レフグラフィックデザインコンペ」の表彰式が行われました。これは、黒が基本とされるデジタル一眼レフのグラフィックの可能性を探るペンタックスからの提案を受け、産学連携プロジェクトとして実現した女子美学内コンペティションです。

表彰式では審査員の佐野ぬい学長、PENTAXイメージング・システム事業部長 井植敏彰氏、特別審査員として玩具の企画・製作を行うザリガニワークスの武笠太郎氏、坂本嘉種氏から受賞者の発表と表彰状授与が行われました。応募があった約50点の作品の中から最優秀賞を受賞した絵画学科洋画専攻2年 清水美里さんの作品に対し、佐野学長からは「最後まで、一筆一筆、丁寧に描かれたその完成度を評価。最終審査では満場一致で最優秀賞とした。」と講評があり、PENTAX 井植敏彰氏からは「どれが売れるかという視点ではなく、どれが面白いかという視点で審査をした。学生の自由な感性に触れることができ非常に有意義であった。」と、このプロジェクトに対して総評をいただきました。

受賞者
最優秀賞　絵画学科洋画専攻2年　清水美里さん
女子美賞　メディアアート学科3年　徳永彩華さん
ザリガニワークス賞　美術学科洋画専攻1年　水野愛里さん
PENTAX賞　絵画学科洋画専攻4年　岩下円さん
佳作　工芸学科4年　林理恵子さん
絵画学科洋画専攻4年　齋藤はるかさん
立体アート学科3年　山梨美緒さん
絵画学科洋画専攻3年　中山沙織さん

受賞作品

授賞式の様子

最優秀賞を受賞した作品

Topics 4 きのこ同好会が「きのこ展」に出展

10月30日から11月7日、本学のきのこ同好会が、国立科学博物館筑波実験植物園で開催された「きのこ展―五感でなっとく！きのこワールド」にアート作品を出品しました。この展覧会は、野生きのこの展示やセミナー、実験、音楽会、アート作品の展示など、ユニークなイベントを通してきのこの魅力を伝えるものです。

作品を出品したきのこ同好会は2009年に発足し、現在、無類のきのこ好き34名の会員で構成される同好会で、夏期・秋期合宿を通してきのこを採取、観察し、きのこアートの制作や展示活動を行っています。今回、会期中に会場内で実施されたギャラリートーク「きのこアートの世界」では、これまで制作してきたきのこアートの制作活動の発表の場として、有意義な機会となりました。

Topics 5 「第27回全国都市緑化ならフェア」でデザイン花壇を公開

9月18日から11月14日、奈良県で行われた「第27回 全国都市緑化ならフェア」（主催：奈良県、㈶都市緑化基金）で、デザイン学科環境デザインコース4年 齋藤菜月さんのデザイン花壇が公開されました。

この「全国都市緑化フェア」は緑豊かな潤いある都市づくりに寄与することを目的に、国土交通省の提唱により毎年、都道府県や政令指定都市等で開催されている全国規模の緑化イベントです。今年、「第27回全国都市緑化ならフェア」が実施されるにあたり、全国の政令指定都市から「日本の花ごよみ」をテーマとしたデザイン花壇が出展されました。この出展に伴い、相模原キャンパスが所在する相模原市・みどりの協会で「フラワーパレットデザインコンペティション」が開催され、齋藤菜月さんが最優秀賞を、増川友梨さんと横山奈央さん（ともにデザイン学科環境デザインコース4年）が優秀賞を受賞。最優秀賞を受賞した齋藤菜月さんのデザイン花壇は実際に会場内で公開され、会期中多くの来場者の目を楽しませました。

Topics 6 第11回インテリア・インターンシップ・インコーポレーション報告

10月20日、第11回インテリア・インターンシップ・インコーポレーション（I.I.I）の報告会が行われました。これは毎年、芸術学部デザイン学科環境デザインコースの学生が、他大学の学生とともに参加しているインテリアデザイン業界へのインターンシップ制度の報告会で、学校教育で学ぶ知識や能力をより実践的に高めることを目的としています。報告会当日は、研修生代表として各研修先から学生1名が報告を行い、本学からは、パワープレイス株式会社の研修に参加した伊藤美華さんが約10日間の研修報告を行いました。

伊藤さんは「学校の中では経験できない、仕事としてのデザインを感じ、学ぶことができました。タイトなスケジュールの中で伝えたいことを的確に伝える方法も習得することができ、今後の制作活動や社会人生活に生かしていきたいです。」と今後の活動への意気込みを語りました。

Topics 7 ファッションデザイナー 宇津木えりさん 特別講義

11月27日、ファッションブランドmercibeaucoup，デザイナー宇津木えりさんの特別講義が杉並キャンパスで行われました。全身をご自身のブランドでコーディネートされた宇津木さんの第一印象は明るく軽やか。その印象通り軽快なテンポのお話で、あっという間に引き込まれてしまいました。ファッションへの興味は、幼い頃母親手作りの服を着ていたことから始まり、学生時代にダンス、音楽、美容師などに興味を持ったものの、高校卒業時には目標をファッションデザイナーに。その後、本学短大でファッションの基礎を学び、更に進学、パリへの留学を経てアパレル業界への道を開きました。現在の宇津木さんの土台は1年間のパリ留学にあり、様々な文化を持つ人々と出会う中、美しいことは1つではないこと、「自分は自分、私はこれでいいのだ」という信念に至ったそうです。自分探しは今でも続いているという宇津木さん。道に迷った時期もあったようですが、多忙な仕事をこなす中でのネガティブな出来事もプラスにするパワーが感じられます。学生へのメッセージとして、「思ったことを一生懸命にやることが大切であり、それがいつか宝になる」という言葉をいただきました。トップデザイナーの飾らない人柄や言葉に、満員の教室があたたかい拍手に包まれました。

Topics 8 「東京デザイナーズウィーク2010 AWARD-学校賞」他　受賞

2010年に25周年を迎えた「TOKYO DESIGNERS WEEK 2010」が、10月29日から11月3日、明治神宮外苑絵画館前球場内に、巨大なテント2基とドームを設置し開催されました。このイベントは1000を越える企業・学校・大使館・デザイナー・ショップ等が参加し、最新のデザインを紹介するものです。

今回は「環境」×「デザイン」をテーマに展開し、地球温暖化や絶滅危惧種といった自然環境までを総称した「くらしの環境」への取り組みの発表となりました。WWF（世界自然保護基金）の協力もあり、大変大勢の方の来場がありました。そのイベントカテゴリーの一部である「学生作品展」の今年のテーマは「Red List－絶滅危惧種－」。INTERIOR、PRODUCT、GRAPHIC、FASHION、FINE ARTを学ぶ学生たちの作品発表、コミュニケーション、次世代のクリエイターを育てる場として開催され、国内外32校35グループの学校が参加し、約400点の作品が展示されました。

本学からも大学院と芸術学部の学生21名（10作品）が参加し、学生作品展委員の審査により女子美ブースは「AWARD－学校賞」（全7校）を授与され、また、個人賞候補（全32作品）に、「王暢：Shall we dance ?」（大学院環境造形1年）と、「柴田菜緒・佐藤美樹：EGOBAG」（プロダクトデザイン4年）の2作品が選出され、公開講評会の壇上のプレゼンテーションの結果、王暢さんの作品が「GRAND AWARD－最優秀作品賞」を受賞しました。また、今年から企画された「STUDENT EXHIBITION AWARD PRESENTATION 2010（学生プレゼンテーション）」では、女子美学生代表の「田口こずえ：BLUE BLOOD」（大学院環境造形1年）が「TDA理事長賞」を受賞しました。3賞受賞は大変な名誉でもあり、本学ブースの各作品は国内外の多くの方々から賛辞をいただき、学生たちは大きな自信と誇りを得ることができました。

（デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻研究室　田村俊明・桜井龍）

Topics 9 ㈱東海理化　産学協同プロジェクト2010

自動車用部品を製造している㈱東海理化からの委託を受け、夏休み期間中に本学と神戸芸術工科大学の学生が産学協同プロジェクト2010を行いました。「自動車を取り巻く通信技術の応用～五感で楽しむ」をテーマに、本学からはデザイン学科プロダクトデザインコースの学生14名が、カー用品の企画、デザインを行いました。今回の参加学生は、普段の生活ではあまり関わらない「カー用品」の企画、デザインに苦労する学生が多かったものの、本学デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻の田村俊明教授をはじめ、助手の先生方、そして、東海理化のデザイナーの方々からアドバイスを受け、女子美生ならではの視点で、制作に取り組みました。今回のプロジェクトでは、制作期間が短期間であったため、学生は毎日朝早くから、夜遅くまで工房に残り、制作を行いました。9月には、愛知県の東海理化本社において、今回のプロジェクトの発表会が行なわれ、300人以上の社員を前に、学生一人ひとりがプレゼンテーションを行い、社員の方から高い評価を受けていました。また、11月には都内のギャラリーにて、展示会が行われ、自動車関連企業の方をはじめとした多くの方が来場されました。今回の産学協同プロジェクトでは、学生は普段の授業で体験したことのない素材や加工法に触れることができ今現在の授業でも生かされています。また、東海理化の社員の方からのアドバイスや、神戸芸術工科大学の学生との交流を通して、学生たちが将来社会に出て活躍するために役立つ、貴重な財産を得たプロジェクトでした。

参加学生の声

嵯峨 希実さん（デザイン学科プロダクトデザインコース3年）

運転しながら赤ちゃんと遊べるコミュニケーションツール。

これまでの作品制作では、友達と意見を言い合うことがなかったのですが、このプロジェクトで、東海理化の方や友人から様々な意見をもらいました。それにより、自分の作品と向き合い、より制作に励むことができました。そして意見を言い合うことの大切さを実感しました。今回の様々な経験を生かし、これからの作品制作に取り組みたいです。

「くるくるリンク」

金スミンさん（デザイン学科プロダクトデザインコース3年）

キーをさすと操作パネルが出て目的地や危険情報を映しこむ。

今回のプロジェクトは「五感で楽しむ」というテーマで行われました。普段車についてあまり考えたことがなかったのですが、実習をする中で、「車に乗っているといろいろな状況が起こるんだ」と思い、今回の提案をしました。学校で得ることのできない様々な経験ができ、充実した時間になりました。これからも今回学んだことを生かしていきたいと思います。

「SPREAD」

NEWS 4 文部科学省GP「大学生の就業力育成支援事業」に採択

本学芸術学部の取り組みが、平成22年度「大学生の就業力育成支援事業」（GP：Good Practice）に採択されました。GP：Good Practice事業は、文部科学省が平成15年から始めた事業で、大学や短大で取り組まれている意欲的な教育活動（大学教育の改善に資する優れた取り組み）を公募・採択し、資金を重点配分するものです。

取組名称「職業的自立と美大の就業力リテラシーの養成
…e-コミュニティ形成と発信力強化の取組…」

この取り組みは学生が卒業後に体験する「職業生活に向けた移行支援」の試みで、産業界との連携を取りながら、美術大学におけるプレゼンテーション力、ライティング力等の就業力リテラシー（就業に必要な基礎力）の育成を図ることを目的としたプログラムです。

社会が求める能力を学生が在学中に身につける方法を取り、具体的に、ビジネスの現場で重要なコミュニケーションスキルとなっているプレゼンテーション力等の養成を目標にしています。また、社会との交流を目的としたSNS（ソーシャルネットワークシステム）をもとに、大学が企業や自治体と協働し、学生の双方向型の学習を可能とする「女子美e-コミュニティ」を形成します。そして、卒業生や企業等とコラボレーションを進めることで在学生を支援し、国内や海外での学生の就業力を高めていきます。さらに、学生たちのグループワークやチームによるプロジェクト型の実践体験学習をもとに、学生の人間的成長力を高め、社会での自立力を育成する取り組みです。

（上）企業と日常雑貨の商品開発の様子
（下）神奈川県立公園来園促進キャンペーンの実施

Topics 10 有田焼折鶴でAPEC会場装飾に協力

11月に神奈川県横浜市で行われたAPEC（アジア太平洋経済協力）の会場装飾に本学が協力しました。

外務省から依頼を受け、「和の心でおもてなし」をテーマに、有田焼折鶴の制作を行いました。有田焼折鶴は厚手の折り紙のような白磁シートを利用して折鶴を折り、それを窯で焼いて制作します。制作には、100名の女子美生が協力しました。

制作された折鶴は、そごう横浜店において11月4日から5日の2日間、人気投票を実施。上位4作品（最優秀賞、優秀賞、事務局長賞）は、首相と外国要人控室、本会議場に展示されました。また、他の作品も会場内施設に全て展示され、会場を華やかに彩りました。

外務省の担当の方々からは、「学生の作品制作に対する妥協のない姿勢には驚いており、すばらしい作品を作っていただき、ありがたく思います」と感謝の言葉をいただき、また、指導をしてくださった関修哉氏からは、「美術大学で制作指導を行ったのは初めてだが、すばらしい作品ばかりだった」との言葉をいただきました。

最優秀賞
「日本の島」（右）
藤本さやか（大学院修士課程美術専攻日本画2年）

優秀賞
八渡理沙（デザイン学科4年）
藤川卓子（絵画学科日本画専攻2年）
事務局長賞
藤枡匠美（絵画学科洋画専攻3年）

Topics 11 インテリアトレンドショー第29回JAPANTEX2010「クリエイターズタウン」に出展

11月17日から19日、東京ビッグサイトにて、インテリア業界を代表する企業が世界から集う国際産業見本市JAPANTEX2010が開催されました。

会場内に設けられた「クリエイターズタウン」には、韓国の1校を含む27校の学生作品が展示されました。今年のテーマは「環・Bagasse・Revolution2010」。各校、Bagasse（サトウキビの汁を搾った後の残りかす）を素材としてテキスタイル造形作品を制作し、本学からは、芸術学部工芸学科と短期大学部専攻科造形専攻工芸デザインコースが出展しました。

■芸術学部工芸学科
『ECOサイクル』
「環」というテーマから生産、消費、廃棄のサイクルを表現。私たちは日々、大量生産されたモノに依存して生きており、それらはいずれ廃棄されます。そこで、消費されたモノが全て再生され、また活用してほしいという思いから、大量に排出されるレシートと、Bagasseを織り混ぜた布を利用して作品を制作しました。二つの素材を組み合わせ、同じ形の円柱を多数作ることで、再び大量生産を行おうという私たちの意志を反映しました。

■短期大学部専攻科造形専攻工芸デザインコース
『管』
人においては血管、植物においては葉脈、あらゆるものの体に張り巡らされたその管は、滞ることなく、その精神や思考を巡らせてゆく。体の隅々、末端にまで気をつかい、研ぎすますその行為こそが環り。

Report 4

大学院GP CCD PLATFORM 002
シンポジウム「誰のためのアートなのか」開催

大学院GPでは、10月6日に、小金井アートスポットシャトーにて、「誰のためのアートなのか」をテーマに、シンポジウムCCD PLATFORM 002を開催しました。

CCD（Community Cultural Development「文化によるコミュニティの発展」）は、地域や社会の問題をアートを通して創造的解決を目指すという概念です。CCD PLATFORMは、様々な立場でアートに関わる人が討議をしながら、「地域振興におけるアートとは何なのか」「アートによるコミュニティの発展が本当に可能なのか」「そこでは本当にアートが必要とされているのか」ということを探っていきます。

7月に実施されたCCD PLATFORM 001では、地域とコミュニティに対するアートの可能性とあり方について広く討議しました。2回目となる今回は、佐藤李青さん（小金井アートフル・アクション！事務局長）杉田 敦教授（美術批評家、本学教授）、富田俊明さん（アーティスト、北海道教育大学 講師）、毛利嘉孝さん（社会学者、東京藝術大学 准教授）の4名をパネリストに迎え、芸術・文化活動を介した社会的実践がその地域や生活する人々にどのように扱われ、またその場所でどのようにアーティストは実践をすることが可能なのかについて討議しました。

CCDにおいては地域のエンパワメントが目的になっており、アーティストは脇に追いやられていないか、行政からの助成を前提にしている場合には、行政に「通る企画」を作ってしまう可能性がないか、日本ではアーティストが行政から信頼される存在になっていないのではないか、アートに特殊な機能・役割を考えたとき、アートの存在意義が大きくぶれてはいないか、などの問題提起がなされ、パネリストそれぞれの経験を基に意見が交わされました。

CCD PLATFORMは今後も引き続き様々な方をパネリストに迎えて開催します。次回は1月中旬を予定しておりますのでぜひご参加ください。

※大学院ＧＰとは「組織的な大学院教育改革推進プログラム」のことで、文部科学省が各大学における教育改革の取り組みがより一層推進されるように、特色のある優れた取り組みを選定し、その支援を行うものです。本学は芸術系大学の専門教育機関の特性を生かし、大学院教育の実質化に根ざした教育プログラムを申請し、採択されています。

Topics 12

トークイベント 表象としての「日本」開催
―ゲスト　森美術館チーフキュレーター 片岡 真実さん―

9月30日、相模原キャンパスにて、本学大学院ＧＰの協力によるCAMP主催のトークイベント「ナショナリズムと芸術生産 シリーズ第4回　表象としての『日本』」が開催されました。森美術館のチーフ・キュレーターの片岡真実さんをゲストに迎え、モデレーターをキュレーターの崔敬華さんが務める形で、本学の杉田敦教授との間でトークが行われました。このトークシリーズは政治ではなく、芸術生産の領域からナショナリズムについて考えてみるという試みで、この第4回では、はじめに片岡真実さんより近代以降の日本のアーティストたちのナショナルなアイデンティティについての考察が示され、その後、海外で日本のアートが圧倒的に「マンガ」「アニメ」のイメージで受容されていることについて、日本のキャラクター文化の大元に「妖怪」の存在があるのではないかという、ご自身が「ネイチャーセンス展」を企画する中で見えてきたという考え方が紹介されました。

1月下旬には、崔敬華さん、CAMP代表の井上文雄さん、杉田敦教授の共同プロジェクトとして、芸術生産に関わる人がナショナリズムという問題に向き合って発信していくタブロイド紙「Na＋」を発行予定ですのでこちらもぜひご購読ください。

「Na+」協力：女子美術大学 大学院 GP
「Na+」HP：http://www.joshibi.net/outreach/gsgp/na_plus/index.html

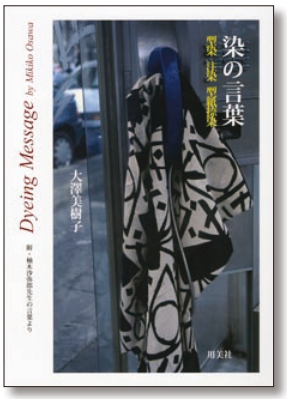
Topics 13

本学教員の出版著書ご紹介

**「芸術表象コンセプトブック
　アート・プラットフォーム」**
北澤 憲昭・杉田 敦　編
（芸術学部美術学科芸術表象専攻教授）
発行：美学出版
定価：本体1600円（税別）
　　ISBN978-4-902078-21-3

「染の言葉」
大澤 美樹子　著
（デザイン・工芸学科工芸専攻教授）
発行：株式会社　用美社
定価：2400円（本体2286円＋税）
　　ISBN978-4-946436-64-2

「アート・プラットフォーム」



「染の言葉」

NEWS・5 100周年記念大村文子基金

創立100周年記念事業の一環として、「100周年記念大村文子基金」は、平成11年に大村智理事長夫妻からの寄付を基に、文子令夫人のお名前をいただいて設立されました。この基金によって運営されている「女子美パリ賞」（第12回）、「女子美ミラノ賞」（第5回）、「女子美 制作・研究奨励賞」（第10回）、「女子美美術奨励賞（留学生対象）」（第9回）、そして本基金の目的のために功績のあった者、および団体に贈られる「大村特別賞」が以下の方たちに授与されました。

■平成23年度　第12回女子美パリ賞

［パリ国際芸術都市のアトリエ利用権／副賞　100万円］

松沢 真紀

平成19年3月 芸術学部絵画学科洋画専攻卒業
平成21年3月 大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域修了

お花見　162.0×162.0㎝/キャンバス、油彩/2010年

■平成23年度　第5回女子美ミラノ賞

［ミラノの本学借り上げマンションの貸与／副賞　100万円］

高橋 香菜子

平成18年3月 芸術学部デザイン学科卒業

株式会社イトーキ 横浜オフィス/空間デザイン

■平成22年度
第10回　女子美 制作・研究奨励賞

［副賞　各20万円］

鶴見 幸代

平成13年3月 芸術学部絵画科洋画専攻卒業

プールサイド Pool side　145.6×103㎝/Lambda Print/2009年

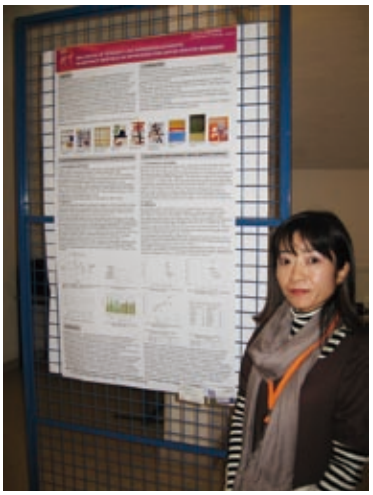
播磨 みどり

平成12年3月 芸術学部絵画科洋画専攻卒業

Written-Lighten　ミクストメディアインスタレーション
写真: Tom Powel/2010年

吉岡 聖美

平成17年3月 短期大学部別科現代造形専修修了
平成18年3月 短期大学部専攻科造形専攻美術コース絵画修了
平成20年3月 大学院美術研究科修士課程芸術文化専攻修了



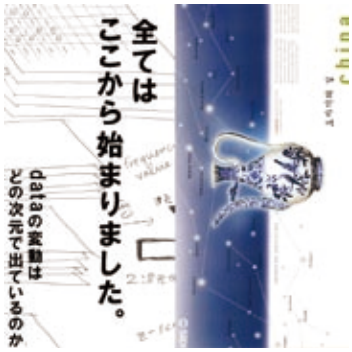
International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research, Paris, 2010.3

■平成22年度
第9回　女子美美術奨励賞（留学生対象）

［副賞　各10万円］

呉 承美

大学院美術研究科修士課程芸術文化専攻色彩学研究領域1年次在籍
国籍　韓国



ある国の文化を語る色彩:
色使いのprototypicalityを探して（その作品と研究）

金 侖正

芸術学部立体アート学科4年次在籍
国籍　韓国

Destroying the PERFECTION　H50×W50×D33cm
／steel, stainless／2009年

金 秀珍

短期大学部造形学科美術コース2年次在籍
国籍　韓国

Plants effect　45×35㎝/リトグラフ/2010年

■平成22年度　大村特別賞　［副賞　記念品］

佐藤 和子　一般社団法人女子美術大学同窓会会長

【授賞理由】

①各地で様々な同窓会主催のイベントを開催し、女子美の社会的な知名度の向上、イメージアップに貢献した。
②大村文子基金女子美ミラノ賞の立ち上げと運営に貢献した。
③同窓会の地方支部の新たな立ち上げに加え、同窓会を一般社団法人化し、その基盤を強固なものにした。

Festival・女子美祭2010

10月22日から24日の3日間、杉並・相模原の両キャンパスで女子美祭が開催されました。今年のテーマは杉並が「はみだせ！とびだせ！女子美祭」、相模原が「女子美万博」でした。

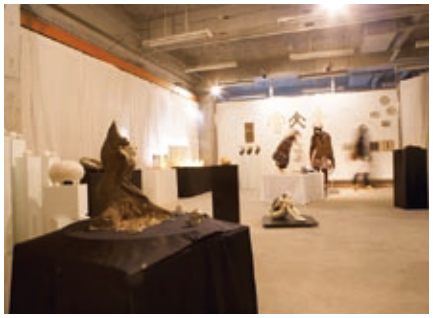
杉並のゲストにはアーティストの奈良美智さん、スーパー高校生うめけんさん、相模原のゲストには、美術監督の種田陽平さん、アニメーションディレクターの伊藤有壱さん、DJやついいちろうさん、ガールズバンドのつしまみれを迎え、連日大盛況のうちに幕を降ろしました。

杉並キャンパス

Festival

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

相模原キャンパス



Report 5 2010就職フェア レポート

10月26日から29日の4日間、相模原キャンパスで「2010就職フェア」を開催しました。このイベントでは、美大生に人気の高い企業15社にお越しいただき、学内企業説明会を行ったほか、就職活動対策として「履歴書 /ES対策講座」や「就職活動マナー講座」、「就職対策メイクアップ講座」を同時開催しました。企業説明会では、低学年の参加者も多く、説明会でも積極的に質問したり、持参したポートフォリオを企業の方に直接見てもらうなど、熱心な姿が目立ちました。マナー講座、メイクアップ講座では、プロの講師から実践的に指導を受け、参加した学生は大きな自信を得たようです。

また、女子美だけでなく、他美大の内定者にも参加いただいた「内定者報告会」では、内定者がそれぞれの就職活動を振り返り、これから就職活動を始める学生に向けて熱いアドバイスを送りました。内定者の話からは、どれだけ熱い想いをもって取り組んできたかがひしひしと伝わってきました。ポートフォリオの公開も行い、学生たちはとても刺激を受けたようです。

企業説明会で質問をする学生

4日間の参加者数はのべ2,158人で、学生の就職活動に対する意識の高さと積極性が感じられるイベントとなりました。

＜参加企業業種＞
広告代理店、広告制作会社、寝具・インテリア、ゲーム、アパレルメーカー、キャラクター、ジュエリー、空間デザイン、映像制作会社、フラワーサービス、玩具、インテリア、化粧品など15社

＜内定者報告会参加者＞
女子美術大学芸術学部デザイン学科 VDコース
4年　牧野理慧さん
多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科
4年　松永美春さん
武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科
4年　吉田孝侑さん

Report 6 クリエイターズBOX 浅葉 克己氏・澤本 嘉光氏 講演会報告

学生に早い時期から進路を考えてもらうための動機付けの機会として、キャリア支援センターでは様々な業界の第一線で活躍するクリエイターを招いた講演会を開催しています。

■浅葉 克己氏講演会（アートディレクター）

9月8日には日本の広告デザインの第一線で活躍されているアートディレクターの重鎮・浅葉克己氏の講演会を開催しました。学科・専攻を問わずにたくさんの学生が参加し、杉並キャンパスだけでなく相模原キャンパスからはるばるやってきた学生も多数おりました。浅葉氏からは、広告やロゴマーク、展覧会など、氏の代表作の紹介やライフワークにされているタイポグラフィ、とりわけトンパ文字の研究など、幅広い分野でのこれまでのお仕事を一挙に紹介していただきました。お話の中で何気なく発せられる言葉から、浅葉氏がいかに日々習慣にして続けていることが多いかに驚かされます。１日に１つの図形を考える、毎朝墨を磨って右巻き・左巻きの渦巻きを書く、日記を書く、感動したものは切り取ってとっておく、毎日観察して写真を撮る、楷書を書く・・・。「いつも楷書を書いています。甲斐性がないので、楷書をずっと書いています。なぜ書いているかというと、東アジアのデザインの核がありそうな気がするのです。ずいぶん前に気がついて、とにかく楷書だけはやった方がいい、と楷書を書いています。」浅葉氏のクリエイティビティの源泉が垣間見え、多くの示唆に富んだ講演会となりました。

■澤本 嘉光氏講演会（株式会社電通クリエイティブディレクター・CMプランナー）

10月13日には、現在日本を代表するCMプランナーとして数多くのCM制作にかかわられている澤本嘉光氏にご講演いただきました。澤本氏は株式会社電通に所属するクリエイティブディレクター兼CMプランナーで、「クリエイター・オブ・ザ・イヤー」など数多くの賞を受賞されています。CM制作がいかにさまざまな「制約」がある中で行われているのか、おなじみのソフトバンクの「ホワイト家族24」のCMなどを例に詳しく説明いただきました。商品の出し方、出演させるタレント、キャッチコピー・・・非常にたくさんの制約があり、なおかつ非常に短期間での制作を求められているCM制作現場。それに対して、その都度すごいスピードで条件をクリアする企画を提案し、観る人の記憶に残るCMを作っている澤本氏の話に会場は驚きの連続でした。犬のお父さんの発する「すべてのものに理由はある」というセリフは、実は澤本氏の口癖でそれを犬に言わせてみた、といった制作秘話などもたっぷりお話しいただき、会場は笑いに包まれました。「先輩はCMを『制約がある芸術だ』と言いますが、僕は自分をサラリーマンだと思っています。『これをしてくれ』という制限がいくつもあって、その制限で囲われたフィールドの中でどうやって解決していくかを考えて逆にアイデアが出たりする。そういう頭の使い方に慣れてしまったのです。クイズを解いているようなものですね。」と話す澤本氏の講演は、学生たちにとってリアルな仕事現場や仕事への取り組み方を知るまたとない機会となりました。

International ・1 スクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ サマー・スクール報告

学術交流協定大学であるスクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ（アメリカ、以下SVA）において、8月2日から9月1日までの31日間にわたって海外サマー・スクールを実施しました。このスクールは、本学とSVAが共同で企画した美術・デザインの実技授業を中心に構成されています。今回が初めての開催で、30名（大学院修士課程1名、芸術学部28名、短期大学部1名）の学生が参加しました。出発までにニューヨーク生活オリエンテーションや事前指導、外国人講師による英語研修を約2ヶ月にわたって受講し、スクール参加に備えました。現地では2クラスに分かれ、午前は英語研修、午後は下記のとおり実技科目4科目を履修しました。

クリエイティブ・イラストレーション

このクラスの課題は、講師から与えられた文章に発想を得て作品を制作するというものです。最初の課題は、夫の圧政を諌めるために裸で馬に乗り街を巡回したという11世紀の英国女性“レディ・ゴディバ”の話に基づくポスター制作、次の課題は、片足が義足であるにも関わらずタップダンスのトップダンサーとしての地位を確立したアフリカ系米国人“ペグ・レグ・ベイツ”の実話を基にした絵本カバー制作でした。講評会では、講師と学生の間で活発な意見が交わされ、学生は、多くの人にとって未知の内容を的確に伝えることの難しさと重要性を学びました。

先生との意見交換と講評

クリエイティブ・ドローイング（フィギュア・ドローイング）

このクラスでは、米国人ヌードモデルを様々な視点から描きます。モデルは男性、女性、老人、黒人、白人と多様性に富み、10～20分ごとにポーズを変えます。キュビズム的に描いたり、横線のみで描いたり、直線のみで描いたり、墨とオイルパステルを同時に使って描いたり、両手を使って描いたりと実験的な方法による表現に挑戦しました。

ブレイン・ストーミング

このクラスで重要なのは、発想と直感。1200個のドットの上に自由に描く“ゼン”、7つの標的の上に自由に描く“ターゲット”、音をイメージで表現する“サウンド・プロブレム”などのユニークな課題に取り組みます。これまで経験したことがない奇抜な課題に当初は戸惑っていた学生も、「恐れることなく、感じるままに制作しなさい」という講師の言葉に励まされ、個性豊かな作品を完成させました。

ブレイン・ストーミング

クリエイティブ・デザイン

2クラスに分かれたこの授業では、2名の講師が1クラスずつ担当します。A組では、大きな紙の上に寝転がった3人をかたどり、その上に自由に描き足して1つの作品を完成させるグループ制作に取り組んだほか、クラス全員でメトロポリタン美術館へ行き、そこで学んだことを生かしてメトロポリタン美術館のグッズデザインの提案もしました。一方、B組では、カラーコピー機をふんだんに使って、2つの課題に挑みました。一つは絵本制作で、ラーメンから連想するイメージを膨らませ、各自が設定したテーマに沿って4ページほどにまとめるもの。もう一つは、SVAの向かいにあるリサイクルショップで購入した「自分を表現するもの」を使った名刺の制作でした。

最終日にはお別れパーティーが開催され、SVA代表者から学生一人ひとりへ修了証書とSVAオリジナルTシャツが贈られました。SVAからのねぎらいの挨拶が終わると、学生がスクールで学んだことやSVAへの感謝の気持ちを英語で堂々とスピーチしました。課題に懸命に取り組みながらも、限られた自由時間を大いに活用して美術館やミュージカルへ足を運んだり、他大学を訪問したりと、刺激的な街ニューヨークで充実した1カ月を過ごしました。

（国際センター）

International ・2 バーミンガム・アート・デザイン学院 サマー・スクール報告

学術交流協定大学であるバーミンガム・アート・デザイン学院（イギリス、以下BIAD）において、8月2日から28日までの27日間にわたって海外サマー・スクールを実施しました。このスクールは、本学とBIADが共同で企画した美術・デザインの実技授業を中心に構成されており、第7回目を迎えた今年は15名（芸術学部11名、短期大学部4名）の学生が参加しました。

学生は様々な分野の実技プロジェクトを経験し、その後、集大成となるファイナル・プロジェクトに臨みました。各実技プロジェクトでは、作品での自己紹介、立体、テキスタイル、版画、金工・木工、石膏・粘土・蠟・プラスチックの素材実験等に取り組み、試行錯誤しながら個性溢れる作品を制作しました。最後のファイナル・プロジェクトでは、自分でテーマを設定し、スクール期間中に経験した技法や素材を生かした作品を仕上げました。日本での作品制作では気付かなかった表現の幅広さや、異なる素材の組み合わせの面白さと感動が作品に表れました。最終日には展覧会を開いてお世話になった方々を招待し、スクールの成果をお披露目しました。

今年は現地滞在の後半にホームステイを導入しました。学生はホストファミリーと日常生活を一緒に過ごして英国の文化理解を深め、また、日本食や折り紙等日本の文化を紹介して、積極的に異文化交流を図りました。短い期間でしたが、家族の一員として過ごし、忘れがたい経験となりました。

（国際センター）

ホストファミリー

JAM・女子美アートミュージアム展覧会情報

JAM 展覧会報告

●パリで暮らす、つくる。　ー創立110周年記念展　女子美パリ賞+αー

会期中にはJAMサポートスタッフの学生の企画・運営によって、出品作家による公開制作、トーク、ワークショップなど、数多くのイベントが開催されました。
卒業生の作家と、在学生のサポートスタッフが協同で取り組む様子は、女子美らしいあたたかい雰囲気で、参加者にも大変好評でした。　（2010年9月17日～10月24日）

●造形さがみ風っ子展

相模原市教育委員会主催による、小中学生の作品展です。
今年度は小学校8校、中学校7校の児童生徒の作品が展示されました。
（2010年10月30日～11月1日）

●第5回ファイル?展

今回から付属高校の生徒も出品できることとなり、美術部の生徒10名が出品しました。残念ながら受賞作品はありませんでしたが、どれも力作で、来年の出品に期待が高まりました。
（2010年11月5日～11月16日）

JAM展覧会予告

●平成22年度　退職教員記念展

今年度は、清水明子先生（元・工芸学科教授）、早瀬和宏先生（メディアアート学科教授）の作品を展示します。
（2011年1月7日～1月23日）

●障害理解とアートフィールド参画支援の取組展―学生達が支援する新しいアートのミッション（仮）

文部科学省「平成20年度　質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択事業「素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信」による取り組みの一環として開催されます。　（2011年2月1日～2月20日）

●女子美術大学大学院修了制作作品展

平成22年度大学院美術研究科修了生の修了制作作品を展示します。
（2011年3月10日～3月20日）

銀座gallery女子美 展覧会報告

●渡辺治美　展

渡辺治美先生（立体アート専攻教授）の生命をモチーフにした石彫とブロンズレリーフの作品を展示。
（2010年9月6日～9月18日）

●1517,806km　女子美術大学×沖縄県立芸術大学　交流展　2010-vol.3

沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科彫刻専攻と女子美術大学芸術学部美術学科立体アート専攻による交流展。
前期：2010年9月20日～10月2日
女子美術大学
　博士1年　福島さやか
　修士1年　鈴木雪絵
　大学4年　小俣千秋、玉木さち江
　　早川沙紀、三谷里奈
沖縄県立芸術大学
　修士2年　杼本愛子、森裕子
　修士1年　金城知美、比留木雄一
後期：2010年10月4日～10月16日
女子美術大学
　博士2年　松尾玲央奈
　修士2年　谷田部由美
　修士1年　笠原光咲子
　大学4年　金侖正、土橋葵、古井彩夏
沖縄県立芸術大学
　修士2年　川上摩季、平安山なほみ
　修士1年　小林弘幸、城間大輔

●DRESS CODE 01　女子美術大学立体アートOG展

立体アート学科2期生、大石泉（金彫）・大野綾子（石彫）・堀井寿乃（ミクストメディア）による3人展。各2点ずつ6点を展示。
（2010年10月18日～10月30日）

●DRESS CODE 02　女子美術大学立体アートOG展

立体アート学科1期生、高あみ（陶、ミクストメディア）、2期生、丹治莉恵（金彫）・栗原優子（石彫）による3人展。高2点、丹治2点、栗原3点、計7点を展示。
（2010年11月1日～11月13日）

●藤倉久美子展

藤倉久美子先生（立体アート専攻教授）の個展。彫刻4点（石膏1点ブロンズ3点）、レリーフ9点（銅8点テラコッタ1点）を展示。
（2010年11月15日～11月27日）

●PAPER SPACE ―紙によるインスタレーション―　小山欽也・小野文則展

小山欽也先生（立体アート専攻教授）と小野文則先生（立体アート専攻非常勤講師）によるインスタレーション展。紙コース有志学生による作品も展示。
（2010年11月29日～12月11日）

Topics 14 学外選抜卒業制作展「女子美スタイル☆最前線」のご案内

＜女子美スタイル☆最前線＞
2011年2月11日（金・祝）～2月14日（月）
11:30～19:00（入場は18:30まで）
場所：BankART Studio NYK
神奈川県横浜市中区海岸通3-9
（横浜みなとみらい線「馬車道駅」6出口［赤レンガ倉庫口］徒歩4分）

今年で5回目の開催となる「女子美スタイル☆最前線」が、2月11日（金・祝）～2月14日（月）、横浜のBankART Studio NYKで行われます。

このイベントは、大学・短期大学部・大学院、すべての学科・専攻・コースの卒業（修了）制作作品の中から、あるテーマに沿って教員のキュレーターチームが選出した作品をBankART Studio NYKの全館を使って展示する大規模な展覧会です。展示された作品を7名のゲスト審査員が審査し、選出された作品には「Rainbow Award」という賞が贈られます。ゲスト審査員は美術・デザイン界の第一線で活躍するギャラリストやクリエイターたちです。会期中にはオープニングイベントで「佐野ぬい学長のライブペインティング」を行うほか、ギャラリートークも実施します。ぜひ、皆様のご来場をお待ちしております。

JOSHIBI rainbow award審査員
葛西 薫氏（アートディレクター）
小山 登美夫氏（小山登美夫ギャラリー／明治大学国際日本学部特任准教授）
曾我部 昌史氏（建築家／神奈川大学工学部教授）
佐野 ぬい（洋画家／本学学長）
ほか3名

オープニングパーティ
日時：2011年2月11日（金・祝） 17：00～

オープニングイベント
佐野ぬい学長のライブペインティングを行います！先生のアトリエをイメージしたステージで、普段制作している雰囲気をそのままに、ドローイングをしていただきます。生演奏を聞きながら佐野先生のリアルなペインティングを肌で感じてください！
ギャラリートークの日時、ゲストなど詳細情報については決定次第展覧会ブログ、WEBサイトでお知らせします。
展覧会ブログ：http://joshibist.exblog.jp
ウェブサイト：http://www.joshibi.net/gw/

Topics 15 卒業制作展・修了制作展のご案内

学内卒業・修了制作展のお知らせ

●女子美術大学・女子美術大学短期大学部　卒業制作展
日時：3月13日(日)～3月15日(火)　10:00～16:00
会場：相模原キャンパス（芸術学部）
杉並キャンパス（短期大学部）

●女子美術大学大学院　修了制作作品展
日時：3月10日(木)～3月20日(日)
10:00～17:00（入館：～16:30）
会場：女子美アートミュージアム（相模原キャンパス内）

●芸術学部芸術学科　卒業研究要旨発表会
日時：1月20日(木)～1月21日(金)
10:00～15:00
会場：相模原キャンパス224教室

●芸術学部芸術学科　優秀卒業研究および大学院修士論文発表会
日時：3月13日(日)　13:00～
会場：相模原キャンパス224教室

学外卒業・修了制作展のお知らせ

平成22年度第34回東京五美術大学連合卒業・修了制作展
日時：2月17日(木)～27日(日)（休館：2月22日(火)）
10:00～18:00（入場：～17:30）
会場：国立新美術館　東京都港区六本木7-22-2

【大学院　美術研究科】

●美術専攻　美術研究領域立体芸術
博士後期課程修了制作「飯嶋桃代・横田典子 展」
日時：1月18日(火)～1月25日(火)
10:00～17:00（最終日：～14:00）
会場：上野の森美術館・ギャラリー
東京都台東区上野公園1-2（03-3833-4191）

●美術専攻　版画研究領域
「女子美術大学大学院版画修了制作展」
日時：1月24日(月)～1月29日(土)
11:00～19:00（最終日：～17:00）
会場：シロタ画廊
東京都中央区銀座7-10-8（03-3572-7971）

●美術専攻　工芸研究領域（織）
「やわらかい光」
日時：2月28日(月)～3月5日(土)
10:30～18:30（最終日：～17:00）
会場：千疋屋ギャラリー
東京都中央区京橋1-1-9（03-3281-0320）

【大学　芸術学部】

●絵画学科洋画専攻　版画コース
「版画コース学外卒業制作展」
日時：1月17日(月)～1月29日(土)
10:00～18:00（最終日：～15:00）
会場：GALLERY うぇすと
東京都中央区銀座1-3-3 銀座西ビルB1F
（03-3564-0829）

●工芸学科　織・染コース
女子美術大学工芸学科卒業制作2011「テキステキ展」
日時：2月24日(木)～2月27日(日)
10:00～19:00
会場：東京デザインセンター
東京都品川区東五反田5-25-19（03-3445-1126）

●工芸学科　陶・ガラスコース
女子美術大学工芸学科卒業制作2011「グラセラミックス！」
日時：1月27日(木)～2月1日(火)
11:30～19:00（最終日：～17:00）
会場：BankART Studio NYK 2F
神奈川県横浜市中区海岸通3-9（045-663-2812）

●デザイン学科　ヴィジュアルデザインコース
「女子美卒業制作展」
日時：3月20日(日)～3月21日(月)
10:00～20:00（最終日：～18:00）
会場：原宿ラフォーレミュージアム
東京都渋谷区神宮前1-11-6（03-3475-0411）

●デザイン学科　プロダクトデザインコース
「JOSHIBI PRODUCT 2010」
日時：3月25日(金)～3月27日(日)
時間は未定
会場：東京デザインセンター
東京都品川区東五反田5-25-19（03-3445-1121）

●デザイン学科　環境デザインコース
「女子美術大学デザイン学科環境デザインコース卒業制作展」
日時：3月20日(日)～3月27日(日)
11:00～18:30（23日・27日：～17:00）
会場：アートギャラリー道玄坂
東京都渋谷区道玄坂1-15-3
プリメーラ道玄坂102（03-5728-2101）

●ファッション造形学科
日時：2月21日(月)～2月27日(日)
11:00～19:00（最終日：～17:00）
会場：Gallery LE DECO 4F・5F・6F
東京都渋谷区渋谷3-16-3 ルデコビル
（03-5485-5188）

●メディアアート学科
「女子美術大学　メディアアート学科
2010年度卒業生有志学外卒業制作展 nuius」
日時：3月2日(水)～3月7日(月)
11:00～22:00（最終日：～18:00）
会場：横浜赤レンガ倉庫1号館1階・2階
神奈川県横浜市中区新港1丁目1番地（045-211-1515）

【短期大学部　造形学科】

●デザインコースクラフトデザイン系　テキスタイルデザイン
「女子美術大学短期大学部
テキスタイルデザイン卒業制作学外展」
日時：2月22日(火)～2月27日(日)
11:00～18:30（最終日：～16:00）
会場：銀座アートホール
東京都中央区銀座8-110高速道路ビル
〈銀座コリドー街〉（03-3571-5170・1655）

●デザインコースクラフトデザイン系　陶芸・メタルデザイン
「陶芸・金工・漆芸　展」
日時：2月13日(日)～2月19日(土)
11:00～19:00（最終日：～17:00）
会場：ギャラリー青羅
東京都中央区銀座3-10-19
美術家会館1F（03-3542-3473）

小野さおり
「シェル美術賞2010」グランプリ受賞作品
ハジマリノザワザワ　油彩　キャンバス　145.5×145.5(cm)2010年

発　行　学校法人 女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　企画部 広報入試課
制作・印刷　株式會社 日相印刷
監　修　山本　吉男
発行日　2011年1月10日

広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に左記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報入試課までご連絡ください。

《広報入試課》TEL. 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL http://www.joshibi.ac.jp